

発明文化論

〈第 84 回〉

丸山 亮

欠落の補完術

謎の恐竜ともいわれたデイノケイルスについて、およそのことが見えてきた。半世紀前にモンゴルで腕の化石が見つかったものの、詳しいことはわからないままだったが、このほど北海道大学などの国際調査チームが新たに発見した化石などをもとに、ほぼ全身の骨格を解明した。成果は英科学誌ネイチャーに発表されている。国際チームは数年前からの2度にわたる調査で約7千万年前の地層に2体の化石を発見し、さらに盗掘されてドイツにあった頭部の骨なども総合して、解明にこぎつけたという。全長が約11メートル、背中には帆のようなものがあることなどがわかった。

7千万年前の恐竜を解明する困難は言うまでもないが、近年の欠落を補うことも決して容易ではない。ヨーロッパの都市には爆撃で失われた建築群をできるだけ元の姿に再現している例が各地にある。ニュルンベルクやワルシャワなどは復元の執念とともに、人間の記憶を保存することの意味を感じさせてくれる。

東京駅の復元も、そうした例に加えてよいだろう。空襲で焼失した南北のドームや装飾を大正時代の創建時の姿に戻すのに、駅舎の再建チームは大変な苦勞を重ねた。ドーム内部の色、天井のレリーフ、屋根材などが、当時の雑誌や記事、写真などを参考に決められていった。外壁の赤レンガの色や形の再現には、愛知県内の土を使い、試作に6年をかけたという。

復元建築は、資料の解釈によって違った結果に至ることもある。青森県の三内丸山遺跡は、縄文時代という時代の情報量の少なさから、竪穴式住居が茅葺、土葺、樹皮葺それぞれの可能なパターンで復元されているが、断定を避けたのも一つの見識だろう。

島根県立古代出雲歴史博物館には鎌倉時代の出雲大社本殿の復元模型が5つ展示されている。これは過去の発掘調査で鎌倉期の巨大な柱が出てきたため、建築史の研究者5人が5通りの復元案を提示し、それを形にしたものだ。依拠した資料は、宮司家に伝わる「金輪御造営指図」という本殿の平面を示した見取り図と、同時代の境内を描いたと推測される「出雲大社并神郷図」など。ただ、神殿の高さの決定には正面図がなかったため、一説の16丈（約48メートル）と現在の高さのもの（約24メートル）まで、解釈が異なる結果となった。

先日、NHKスペシャル「カラーでよみがえる東京——不死鳥都市の100年」を見た。白黒フィルムで残されていた映像に着色することで、浅草12階の外壁の色や関東大震災で迫る炎の色が生々しく蘇った。NHKとフランスの専門家がチームを組み、厳密な時代考証を経て色を特定したもので、建造時の東京駅の姿も含まれていた。デジタル技術を駆使して実現させたという。

現代では演奏されなくなった雅楽の楽器の復元も、試みられている。天平時代の箏篋（くご）と呼ばれる弦楽器は正倉院御物として実物が伝わるため、復元してその演奏が行われたことがある。

去る9月、目の加齢黄斑変性という疾患の治療に、理化学研究所などのチームは患者の皮膚から作製したiPS細胞を網膜の組織に分化させたものを移植させる手術を行い、成功したと伝えられる。網膜下の傷んだ組織を正常な組織に置き換えたもので、再生医療の本格的な始まりを予感させる。恐竜のDNAから恐竜を現代によみがえらせるジュラシック・パークの世界に一步近づいた。

欠落を補完するには、復元に必要な情報と技術がそろってはいなくてもはならないが、インターネットなどによるビッグデータが利用できるようになったことで可能性が広がり、復元や再生は新しい時代に入ったといえよう。

（まるやま りょう 共生国際特許事務所 弁理士）